＜遺物＞第24図～第25図。61は大型の壺形土器である。胴中央部付近に最大径をもち、底部にかけて急激にすぼまる。頸部から口縁部にかけては直立気味にたちあがる。口縁部から胴上半部にかけては、無文地に沈線文が施され、胴下半部は縄文が施されている。口縁部、頸部、胴中央部付近には平行沈線がめぐり、口縁の沈線は２条、その他は４条である。また、頸部の沈線の下位、胴部の沈線の上位には沈線に沿って、短沈線による列点文が施されている。頸部と胴部の平行沈線は４条１組の縦位沈線によって結ばれている。この縦位沈線は、ほぼ等間隔で４ヶ所に配置され、胴上半部の無文帯を４つに区画している。外面の調整・施文順は、刷毛目→ＬＲ縄文(横)→磨き→横位沈線→縦位沈線→列点文になる。刷毛目は、口縁部から頸部が縦位、胴部では横・斜めに施されている。内面調整は、刷毛目→磨きの順である。胴下半部の外面にはアスファルト状の物質が２ヵ所(対称の位置)に付着している。この物質は、上から下へ垂れるような形で付着しており、長さ20㎝前後に及ぶ。この他に外面には黒斑状の部分がみられる。69は笠形の蓋形土器である。全体的に摩滅しているため、調整・施文とも不明瞭である。口縁部には３条、つまみ部と口縁部内面には２条の平行沈線が施されている。68は盤状の蓋形土器である。上面の文様は、周縁に沿ってめぐる３条の同心円状の沈線、その内側に施された８本１組の十字状の沈線、周縁をほぼ等間隔で刻む短沈線によって構成されている。上面には２個の穿孔が施されているが、本来はこれと対称の位置にも対になる穿孔があったと推測される。側面は、無文帯と平行沈線によって文様が構成されているが、磨きが不十分なため、刷毛目が多く残っている。外面の調整・施文順は、上面が、磨き→沈線→短沈線で、側面が、刷毛目→磨き→沈線→短沈線(上面と同一)である。沈線は全体的に浅い。内面は、刷毛目→磨きの順である。

＜考察＞当遺構は、１．壁や底面が不明瞭であること、２．耕作の影響は受けていないことなどの理由から、何らかの遺構が構築後あまり時間が経過しないうちにカクランを受けたものと考えられる。大型の壺がその場で潰れたような状態で出土していることから土器棺墓のような遺構であったことも考えられる。遺物の中には蓋形土器が２点含まれるが、小さいため壺形土器とセットで合口を成していた可能性は低い。

ＳＫ11

＜位置＞ＬＳ53に位置する。

＜規模＞長軸(東―西)1.05m、短軸(北―南)0.9m、深さ0.1mの規模である。

＜検出状態＞確認調査で検出された土坑である。確認面付近で土器底部と胴部細片が散在していた。

＜堆積土の状態＞埋め戻しが行われた痕跡が認められる。

＜壁・底面の状態＞浅い皿状に立ち上がる。底面には凹凸がある。

＜遺物の出土状態＞確認面付近からの出土がほとんどであるが、遺物量は少ない。

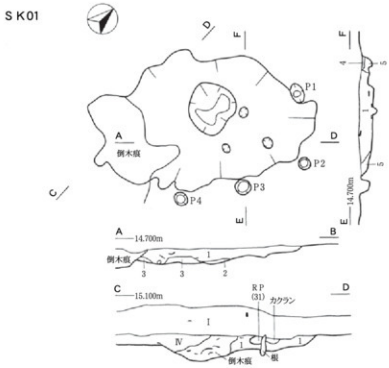
＜その他＞東側はピットに切られている。確認面から弥生時代の土器が出土した。

＜遺物＞第25図72～75。弥生時代の土器が出土している。器種の明らかなものには甕や鉢がある。72は甕形土器の口縁部で、口縁部が緩く外反し、外面の調整・施文順は、刷毛目→縄文である。

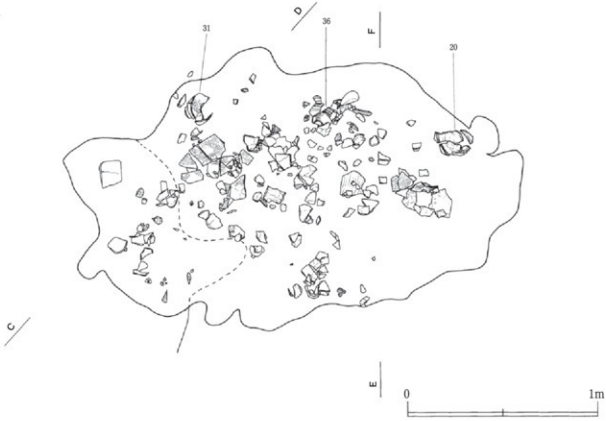
73は鉢形土器で底部からやや丸みをもって立ち上がる。口縁部に沈線、胴部には縦走する縄文が施され、調整・施文順は、刷毛目→縄文→沈線である。

＜考察＞確認面からの掘り込みが浅いため、性格は不明である。

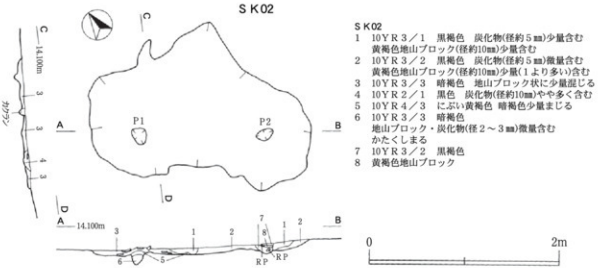
ＳＫ30

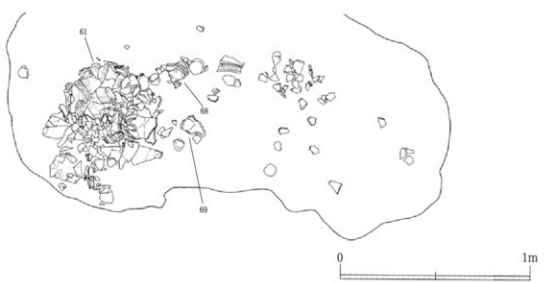


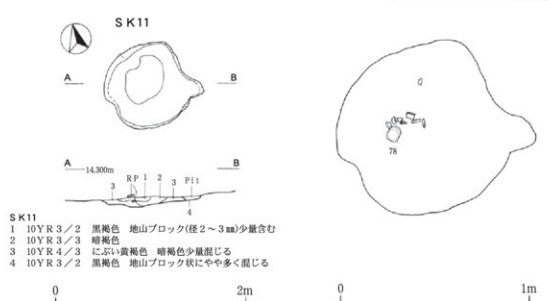
ＳＫ01
1　10ＹＲ３／２　黒褐色　炭化物(径10㎜)少量～やや多く含む　遺物を多く含む
2　10ＹＲ３／３　暗褐色　かたくしまる
3　10ＹＲ３／３　暗褐色　地山ブロック状に少量混じる　かたくしまる
4　10ＹＲ３／２　黒褐色
5　10ＹＲ３／４　暗褐色　地山ブロック状に混じる



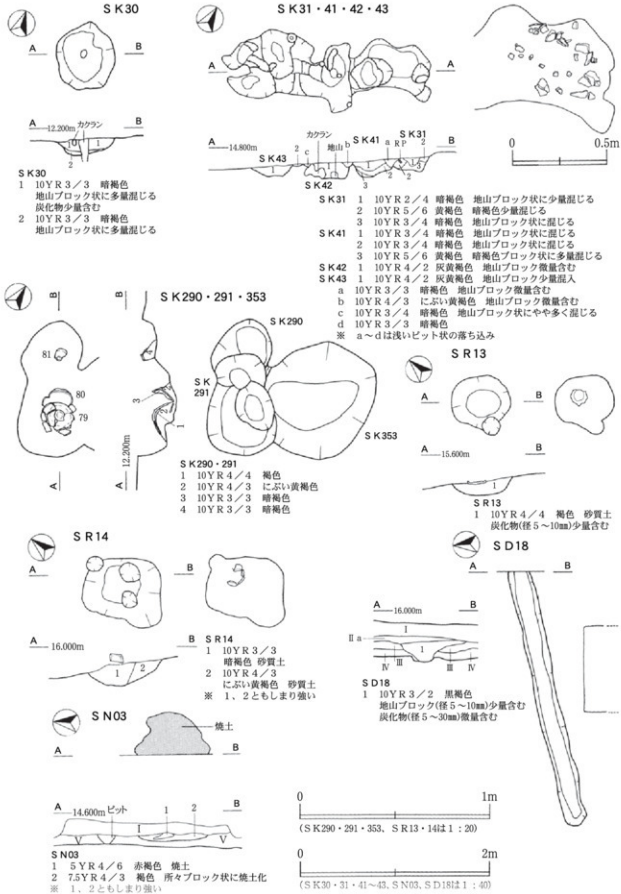
第12図　ＳＫ01土坑







第13図　ＳＫ02・11土坑



第14図　ＳＫ30･31･41～43･290･291･353土坑、ＳＲ13･14土器埋設遺構、ＳＮ03焼土遺構、ＳＤ18溝跡

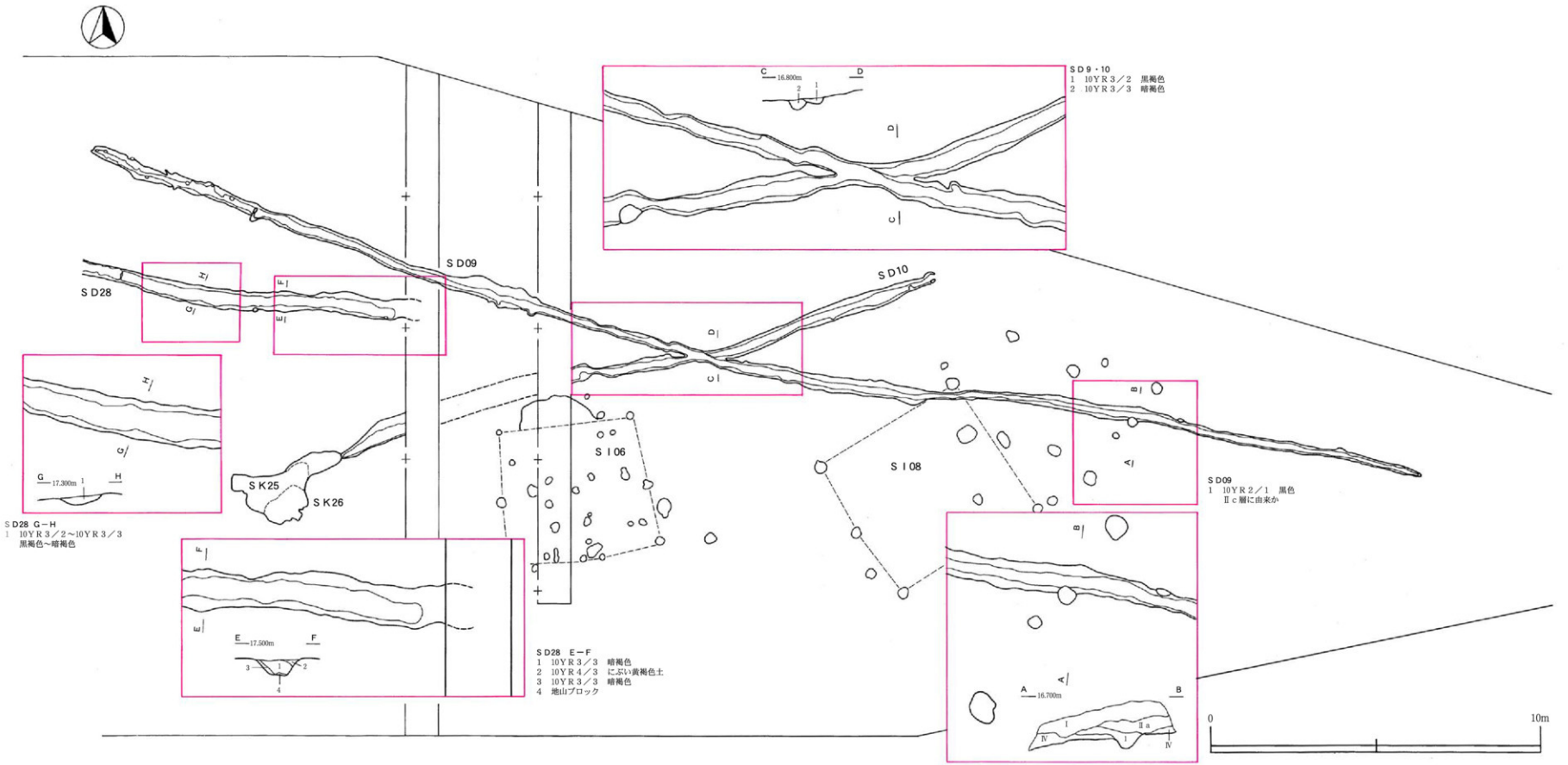
＜位置＞ＭＤ44・45にかけての範囲に位置する。
＜規模＞北―南0.7m、東―西0.6m、深さ0.2mの規模である。
＜検出状態＞Ⅴ層精査時に円形暗褐色プランを検出し土坑として精査をはじめた。
＜堆積土の状態＞部分的に攪乱があるが、堆積土は２つに分層され、自然堆積と考えられる。
＜壁・底面の状態＞壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平らである。
＜遺物の出土状態＞堆積土からは、縄文の施された土器細片や石器(石鏃の未製品含む)・フレイク、陶器片などが出土した。このうち陶器片は攪乱部からの出土である。
＜遺物＞第25図Ｓ１は基部にアスファルト(スクリントーン部分)の付着した石鏃状の石器である。
＜考察＞堆積土中の出土土器には縄文が施されているため、縄文・弥生時代の遺構と判断したが、遺構の性格については不明である。

ＳＫ31・41・42・43

＜位置＞ＬＰ56に位置する。
＜規模＞長軸(ＳＫ31～43)2.15m、短軸(北西―南東)0.7前後m、深さ0.17mの規模である。
＜検出状態＞Ⅴ層上面で土器集中地点と暗褐色の落ち込みとして確認した。当遺構は小土坑と小ピットの切り合いからなる。小ピットはａ、ｂ、ｃ、ｄに分けられる。
＜堆積土の状態＞全体的に地山ブロックを含んでいるため自然堆積とは考えにくい。
＜壁・底面の状態＞全体的に根などによる攪乱が激しく、壁や底面は凹凸が激しい。
＜遺物の出土状態＞ＳＫ31の確認面付近で同一個体と考えられる大小の土器片が出土した。
＜遺物＞第25図76～78。同一個体と考えられる。頸部には横位の沈線、胴部にＬＲ縄文を施している。底部外面はよく磨かれている。
＜考察＞遺構の性格は不明である。小ピットは全ての堆積土を切っているため当遺構よりは新しい。

ＳＫ290・291・353

＜位置＞ＭＤ44に位置する。
＜規模＞290－291(北西－南東0.7m）、291－353(南西－北東0.9m）、深さ0.1m(290)、0.25m(291)、0.12m(353)の規模である。
＜検出状態＞当初、柱穴として精査を進めたが完掘間際に出土した土器の状態から、土器埋納遺構と認定し調査を行った。
＜堆積土の状態＞ブロック状の地山を少量含む10ＹＲ４／３にぶい横褐色土が堆積していた。人為堆積と考えられる。
＜壁・底面の状態＞290、291は急に立ち上がるが、353は緩やかに立ち上がる。290、291ともに底面は平らであるが291には１段低い掘り込みがある。
＜遺物の出土状態＞ＳＫ290から小型の鉢形土器(第26図81)が出土し、ＳＫ353から出土した土器片と接合した。ＳＫ291からは脚部の欠損した高坏形土器(第26図79)の体部と鉢形土器の胴下半部(第26図80)が一部重なり合うような状態で出土した。その他に微細な土器片が数点出土している。
＜遺物＞第26図79～81。79は高坏形土器の体部である。体部上半には変形工字文を、体部下半にはＲＬ縄文を施している。内面には３条１組の平行沈線が約２cmの距離をおいて施されている。外面の調整・施文順は、縄文→磨き→沈線となる。内面は、磨き→沈線の順である。80は甕形、鉢形、壺形いずれ



第15図　ＳＤ09・10・28溝跡

かの土器の胴下半部～底部である。外面の調整・施文順は、刷毛目→縄文(ＬＲ)である。底面は入念に磨かれている。内面は、磨きが施されているが底面は雑である。81はミニチュアの鉢形土器である。外面、内面ともに刷毛目調整が施されているが、内面には輪積み痕が残っている。

＜考察＞それぞれの新旧関係を把握することはできなかった。ＳＫ291の出土状態は合口状の形態で埋納された土器の状態がくずれ、このようになったと推測される。ＳＫ290・291とも土器埋納遺構と考えられる。353の性格については不明であるが、290から出土した土器との接合関係から290・291と関連した遺構である可能性が高い。

（３）土器埋設遺構

ＳＲ13

＜位置＞ＬＯ67に位置する。

＜規模＞北西－南東0.6m、北東－南西0.5m、深さ0.1mの規模である。

＜検出状態＞Ⅴ層面精査中に土器底部を検出し、取り上げたところ、さらにその下から別個体の土器底部が検出された。周囲を精査したところ掘り形と考えられるプランを確認したため遺構として精査を行った。

＜堆積土の状態＞土器底部から掘り形底面までは炭化物を含む褐色土が堆積する。

＜遺物＞第26図82、83。ともに深鉢形土器の胴下半部～底部と考えられる。82が下位、83が上位の土器である。共に胎土には砂礫を多く含む。83にはＲＬ縄文が施されている。

＜考察＞土坑を掘り、そこに土器底部を２つ重ね合わせて埋納したと考えられる。出土した土器から、時期は縄文時代と考えられるが詳細な時期は不明である。

ＳＲ14

＜位置＞ＬＮ67に位置する。

＜規模＞長軸(北－南)0.9m、短軸(東－西)0.7m、深さ0.15mの規模である。

＜検出状態＞Ⅳ層精査時に土器の台部を検出した。周辺をⅤ層まで掘り下げたところ土器の周囲に暗褐色プランを確認したため、土器埋設遺構として精査を行った。

＜堆積土の状態＞２つ層のが堆積し、ともにしまりは強い。

＜遺物＞第26図84。台付き深鉢形土器の台と考えられる。入念な磨きの後に、横位の２条の平行沈線を施している。

＜考察＞台部が正立した状態で出土しているため、人為的に埋納された可能性が高い。

（４）焼土遺構

ＳＮ03

＜位置＞ＬＲ52に位置する。

＜規模＞南北0.8m　東西0.5m(残存部分)の規模である。

＜検出状態＞確認調査で検出された遺構である。確認調査のトレンチ断面で焼土を確認した。

＜焼土の状態＞Ⅳ層面で焼土の広がりを確認したが、上面は耕作の影響を受けているため本来は少し上の面(Ⅳ層より上層)で形成された可能性がある。

＜考察＞地床炉の可能性があるため、周辺を精査したが焼土に対応する柱穴はみつからなかった。そのため当時(弥生時代)の生活面付近に形成された屋外の焼土遺構と判断した。

（５）溝状遺構

ＳＤ09

＜位置＞ＬＮ59、ＬＭ60、ＬＭ61、ＬＭ62、ＬＭ63、ＬＭ64、ＬＭ65、ＬＬ65、ＬＬ66、ＬＬ67、ＬＬ68、ＬＫ68、ＬＫ69にかけての範囲に位置する。

＜規模＞長さ41.5m、幅0.3～0.7m、深さ0.2m前後の規模である。

＜検出状態＞Ⅳ層で溝状の黒色プランを検出した。

＜堆積土の状態＞自然堆積と考えられる。

＜壁・底面の状態＞底面は丸みを帯び、壁は急に立ち上がる。

＜遺物＞弥生時代の土器が出土している。第26図84は頸部に平行沈線、胴部にＬＲ縄文を施した土器である。焼成は良好である。

＜考察＞ＳＤ10と切り合う。土層断面観察でＳＤ10より古いことを確認した。堆積土中にⅡｃ層が堆積することから弥生時代の遺構と考えられる。

ＳＤ18

＜位置＞ＬＮ55、ＬＯ55にかけての範囲に位置する。

＜規模＞長さ2.8m(調査区東に隣接する畑地にのびる)、幅0.25m、深さ0.2mの規模である。

＜検出状態＞Ⅴ層精査中に溝状の黒色プランを検出した。

＜堆積土の状態＞自然堆積と考えられる。

＜壁・底面の状態＞調査区境界付近の断面観察では、掘り込み面に向かうにしたがい緩やかな立ち上がりになっている。底面はほぼ平坦である。

＜遺物＞出土しなかった。

＜考察＞調査区境界の断面観察によりⅢ層を切っていること、堆積土の上にⅡａ層が堆積することを確認した。このため、当遺構はⅡｃ層期に構築されたと考えられる。

ＳＤ19

＜位置＞ＬＬ44杭から北東にＬＫ44・45・46、ＬＪ47、ＬＪ48にかけての範囲に位置する。

＜規模＞長さ18.5m(調査区東に隣接する畑に延びる)、幅0.4～1.0m、深さ0.15～0.35mの規模である。

＜検出状態＞Ⅴ層精査時に黒褐色の溝状プランを検出した。

＜堆積土の状態＞自然堆積と考えられる。

＜壁・底面の状態＞底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

＜遺物の出土状態＞埋土から弥生時代の土器、石器(剥片)が出土した。ほとんどの土器は摩滅気味である。

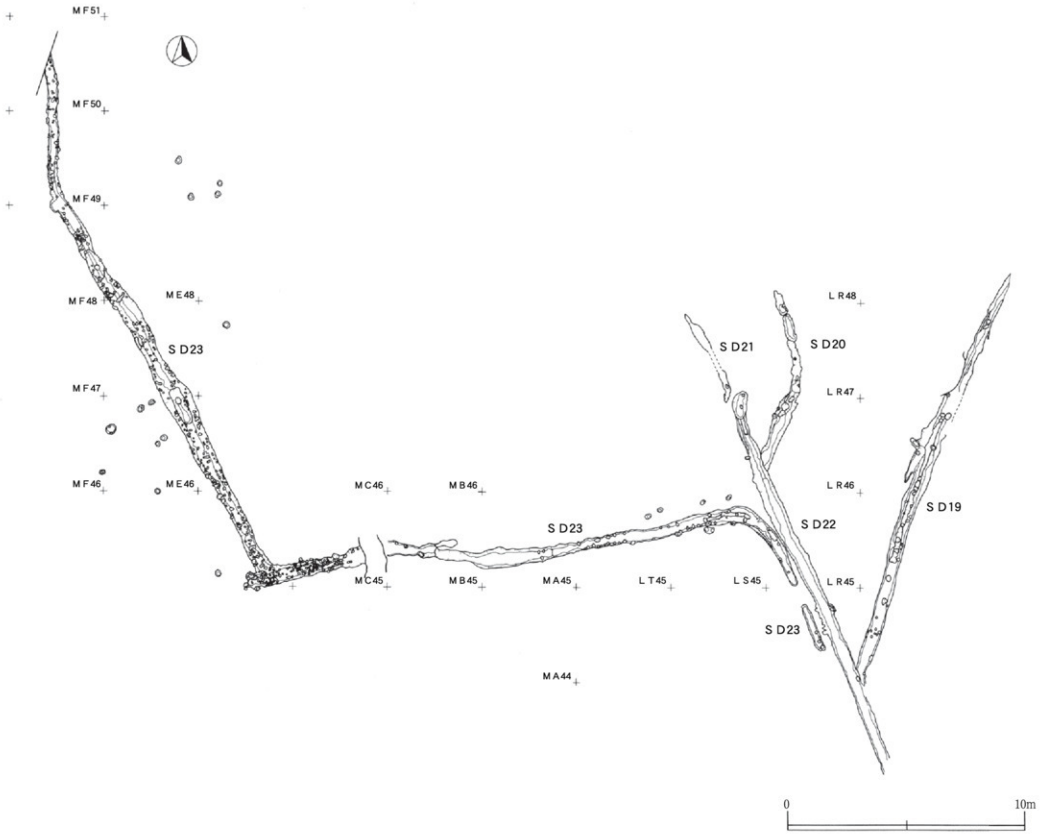
＜遺物＞第26図86は磨かれた外面に縦位・横位の沈線が施されている。内面の調整は磨きである。

＜考察＞ＳＤ22と切り合う。土層断面観察でＳＤ22より古いことを確認した。

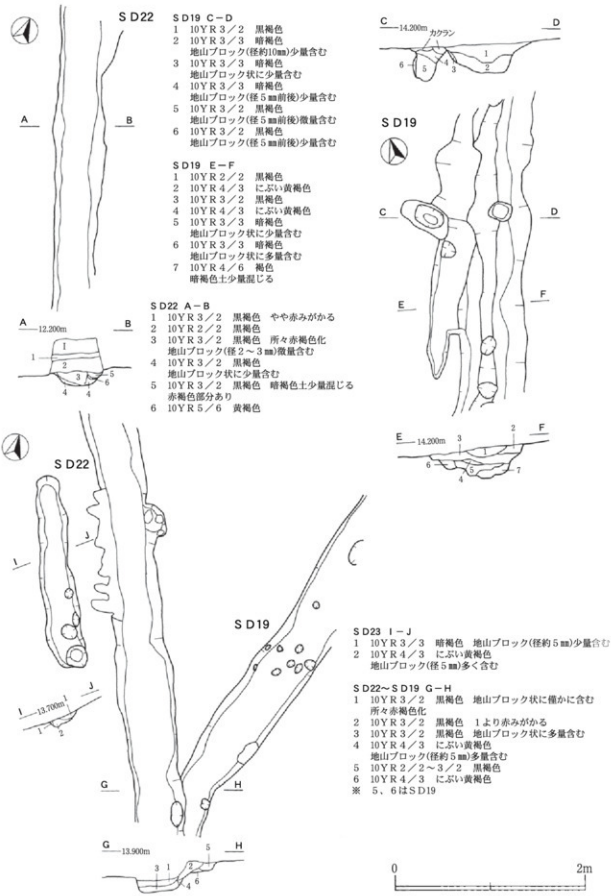
ＳＤ23

＜位置＞ＬＬ44、ＬＬ45、ＬＭ45、ＬＮ45、ＬＯ45、ＬＰ45、ＬＱ45、ＬＲ45、ＬＲ46、ＬＳ46、ＬＳ47、ＬＳ48、ＬＴ48、ＬＴ49、ＬＴ50にかけての範囲に位置する。

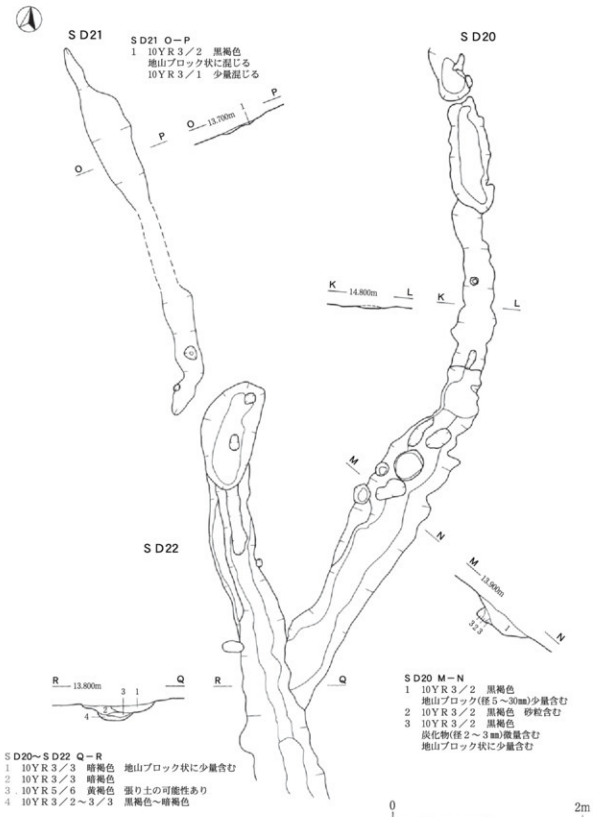
＜規模＞長さ51m、幅0.3～1.2m、深さ0.15～0.55mの規模である。



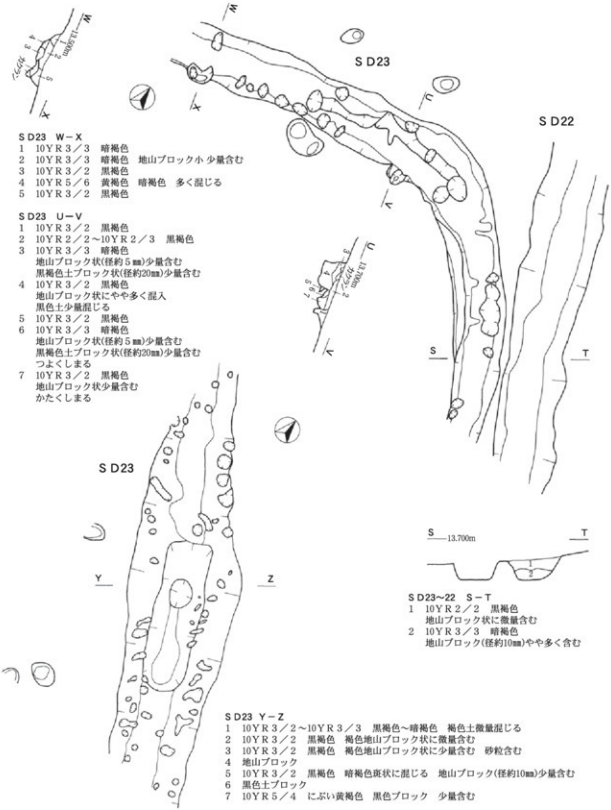
第16図　ＳＤ19～23溝跡



第17図　ＳＤ19・22溝跡



第18図　ＳＤ20～22溝跡



ＳＤ23　Ｗ－Ｘ
1　10ＹＲ３／３　暗褐色
2　10ＹＲ３／３　暗褐色　地山ブロック小 少量含む
3　10ＹＲ３／２　黒褐色
4　10ＹＲ５／６　黄褐色　暗褐色　多く混じる
5　10ＹＲ３／２　黒褐色

ＳＤ23　Ｕ－Ｖ
1　10ＹＲ３／２　黒褐色
2　10ＹＲ２／２～10ＹＲ２／３　黒褐色
3　10ＹＲ３／３　暗褐色
　地山ブロック状(径約５㎜)少量含む
　黒褐色土ブロック状(径約20㎜)少量含む
4　10ＹＲ３／２　黒褐色
　地山ブロック状にやや多く混入
　黒色土少量混じる
5　10ＹＲ３／２　黒褐色
6　10ＹＲ３／３　暗褐色
　地山ブロック状(径約５㎜)少量含む
　黒褐色土ブロック状(径約20㎜)少量含む
　つよくしまる
7　10ＹＲ３／２　黒褐色
　地山ブロック状少量含む
　かたくしまる

ＳＤ23～22　Ｓ－Ｔ
1　10ＹＲ２／２　黒褐色
　地山ブロック状に微量含む
2　10ＹＲ３／３　暗褐色
　地山ブロック(径約10㎜)やや多く含む

ＳＤ23　Ｙ－Ｚ
1　10ＹＲ３／２～10ＹＲ３／３　黒褐色～暗褐色　褐色土微量混じる
2　10ＹＲ３／２　黒褐色　褐色地山ブロック状に微量含む
3　10ＹＲ３／２　黒褐色　褐色地山ブロック状に少量含む　砂粒含む
4　地山ブロック
5　10ＹＲ３／２　黒褐色　暗褐色斑状に混じる　地山ブロック(径約10㎜)少量含む
6　黒色土ブロック
7　10ＹＲ５／４　にぶい黄褐色　黒色ブロック　少量含む

第19図　ＳＤ22・23溝跡

＜検出状態＞Ⅴ層精査時に黒褐色の溝状プランを検出した。
＜堆積土の状態＞一部を除き自然堆積と考えられる。
＜壁・底面の状態＞底面は平らであるが、底面に根穴状の凹凸が多く見られる。壁は急角度で立ち上がる。
＜遺物の出土状態＞堆積土から弥生時代の土器、石器(剥片)が多く出土した。当遺跡の弥生時代の溝の中では遺物の出土量が最も多い。土器は、ほとんどが細片である。
＜その他＞ＬＭ45グリッドで南北に延びる溝の向きが東西方向へ変わり、ＬＲ45グリッドでもとの方向へ戻る。ＬＳ46・47グリッド付近では掘り込みが深くなる。
＜遺物＞第26図88～99。91は甕形土器の頸部～胴上半部である。頸部には横位の平行沈線、胴部には地文上に列点文が施される。列点には木目痕も残っている。95は高坏形土器の体部と考えられる。口縁に沿って３条の平行沈線が施されている。胎土は砂粒を多く含み、ざらついているため調整は不明である。胎土には金雲母が含まれている。
＜考察＞ＬＳ47付近の土層断面観察では埋め戻しと考えられる層(７層)がある。深く掘りすぎた溝を埋め戻し、深度を周囲の底面の状態に合わせたと推測される。埋没過程は自然堆積である。

３．遺構外出土遺物

（１）縄文時代・弥生時代の土器

時期毎に大きくⅢ群に分類し、さらに調整・施文技法により細分した。弥生時代の土器については器種ごとの分類の後、細分をおこなった。アルファベットの大文字は器種、小文字は器形・調整・施文技法による分類項目である。なお、遺構から出土した土器もここに含めている。

Ⅰ群土器

縄文時代中期、後期初頭の土器(第27図)
Ⅰａ類：折り返し口縁をもつもの(100、101)。
Ⅰｂ類：口縁に刺突や沈線を施すもの(103)。103は深鉢形土器の口縁部である。地文上に３つの円形刺突文と沈線が施されている。
Ⅰｃ類：地文上に沈線が施されるもの(102～108)。102、104、105は深鉢形土器の一部であるが沈線と磨消縄文によって文様が構成される。
Ⅰｄ類：地文が短軸絡条体の回転施文によるもの(108～122)。
Ⅰｅ類：低部に木葉痕を有するもの(126)。

Ⅱ群土器

縄文時代晩期の土器(第27図)
Ⅱａ類：工字文を有するもの(123、124)。123は鉢形土器の口縁部である。地文としてＲＬ(横)縄文を施した後、口縁部を磨き、そこに工字文を施している。124は同一個体である。
Ⅱｂ類：口縁部に平行して４条の沈線が施されるもの(125)。125は鉢形土器の口縁部である。口縁上端には刺突が、胴部には緻密なＬＲ(横)縄文が施される。

Ⅲ群土器

弥生時代の土器 器種ごとに５分類した。これらの器種は、器形や文様によりさらに細分される。

Ａ類　甕形土器、Ｂ類　鉢形土器、Ｃ類　壺形土器、Ｄ類　高坏形土器、Ｅ類　蓋形土器、
Ｆ類　器種不明の胴部・底部

Ａ類　甕形土器(第20図１～19、第25図62～66、第26図72・85・87～91、第28図127～153)
頸部の沈線により口縁部と胴部の文様帯が分けられ、口縁部は緩やかに外反する。調整施文順としては、刷毛目調整の後、縄文や沈線を施すものが多い。口縁部から頸部にかけての縦位の刷毛目は意図的に残されているものと、そうでないものがある。口縁部、胴部に施される縄文はＬＲがほとんどである。このような中、137・142・143・144・146は器形や文様を異にした土器である。137は口縁が直線的に外反する甕で、口縁には原体の斜め回転による縦走縄文、内面には２条の沈線が施されている。この縦走縄文は縦位の刷毛目のような装飾効果をもたらしている。142は口縁上端部に刺突列が施されている。頸部にナデを施した後、胴部との境目に２条の平行沈線をめぐらし、沈線間には雑な列点文を施している。胴部には縄文が施されているが原体は不明である。色調は明赤褐色を呈し、胎土や焼成が明らかに他の土器とは異なっている。143・144は同一個体で、壺に近い器形と推測される土器である。頸部は磨かれた後、平行沈線が施されいる。色調は黒色～黒褐色土を呈している。146も同様な土器である。

Ｂ類　鉢形土器　主に器形のちがいにより細分した。
Ｂａ類(第29図154～158)口縁部～頸部が「く」の字状に外反し、沈線文で文様が構成されるもの。口縁に突起を持つもの、口縁部内面に沈線をめぐらすものが多い。沈線は工字文的なものと直線的なものに分けられる。
Ｂｂ類(第21図20)口縁部～頸部が「く」の字状に外反し、磨消縄文と沈線によって文様が構成されるもの。
Ｂｃ類(第21図27、第29図161・162)口縁部～胴部下半までのラインが丸みを帯びるもの。平行沈線や列点により口縁部と胴部の文様帯が分けられる。
Ｂｄ類(第21図21～26・29・30、第25図67、第26図92～95、第29図164～173、第30図174～183)底部～口縁部が直線的に立ち上がるもの。沈線の太いものと細いものがある。太いものの中には貼瘤を有するものがある。また、土器自体も厚手のものと薄手のものに分けられる。
Ｂｅ類(第21図28、第29図159・160)口縁部が緩やかに外反するもの。159・160は同一個体である。器表面全体に縄文を施し、口縁部や頸部を軽く磨いた後、沈線を施している。沈線は横位の平行沈線間に鋸歯状沈線が施されている。
Ｂｆ類(第30図184)底部が丸いもの。低部付近のみで全体の器形は不明である。沈線による文様の単位などは判然としない。
Ｂｇ類(第29図171)口縁部が反「く」の字状に内反するもの。沈線間に篦状工具の先端部による列点文が施されている。

Ｃ類　壺形土器　口頸部が直立気味のものと外反気味のものがある。文様構成により細分した。
Ｃａ類(第30図187・190)変形工字文を有するもの。187は小型の壺型土器である。口唇部上端には刺突が、胴部には変形工字文が施される。内面には輪積み痕が残っている。色調は橙色を呈する。
Ｃｂ類(第30図188)頸部に平行沈線をめぐらせ、胴部には縄文を施されるもの。188は大型の壺形土器である。口縁部から頸部にかけて４条の平行沈線をめぐらせ、頸部には横ナデ調整が施されている。

れている。色調は明褐色を呈する。

Ｃｃ類(第21図31～34、第24図61、第26図86、第30図191～193)口縁部～胴部上半が磨かれ、そこに沈線や列点文などで文様を施すもの。191は大型の壺形土器である。最大径部付近に平行沈線がめぐり、沈線間には２段にわたって列点文が施されている。192・193は小型の壺型土器である。頸部と胴部の境目に沈線がめぐり、それに沿って列点文が施されている。胴部は入念に磨かれている。

Ｃｄ類(第21図35)地文上に平行沈線や列点文などが施されるもの。

Ｃｅ類(第30図189)多条の太い平行沈線により文様が構成されるもの。189は小形の壺形土器である。外面には多条の平行沈線が、口縁部内面には一条の沈線がめぐっている。内外面とも入念な磨き調整が施されている。

Ｃｆ類(第30図185・186・195・196)多条の細い沈線により文様が構成されるもの。195・196は小型の壺型土器の肩部である。多条の沈線が密に施されている。

Ｃｇ類(第30図194)地文上に平行沈線や鋸歯状文を施すもの。

Ｄ類　高坏形土器(第26図79、第31図197～204)

Ｄａ類(第29図197・198)体部の文様が太い沈線で構成されるもの。

Ｄｂ類(第21図36)体部上半に平行沈線が施されるもの。

Ｄｃ類(第26図79)　体部上半に変形工字文が施されるもの。

Ｄｄ類(第21図37、第26図84、第31図199～204)脚部を一括した。沈線が太いもの(200～203)、細いもの(199・204)に分けられる。200～203は明赤褐色を呈する土器で胎土に金雲母を含んでいる。199は地文としてＬＲ縄文が施されている。204は沈線を多用した高坏形土器の脚部で、鋸歯状沈線のモチーフを利用した三角形の透かし孔が施されている。

Ｅ類　蓋形土器　盤形、笠形、板状に分けられる。

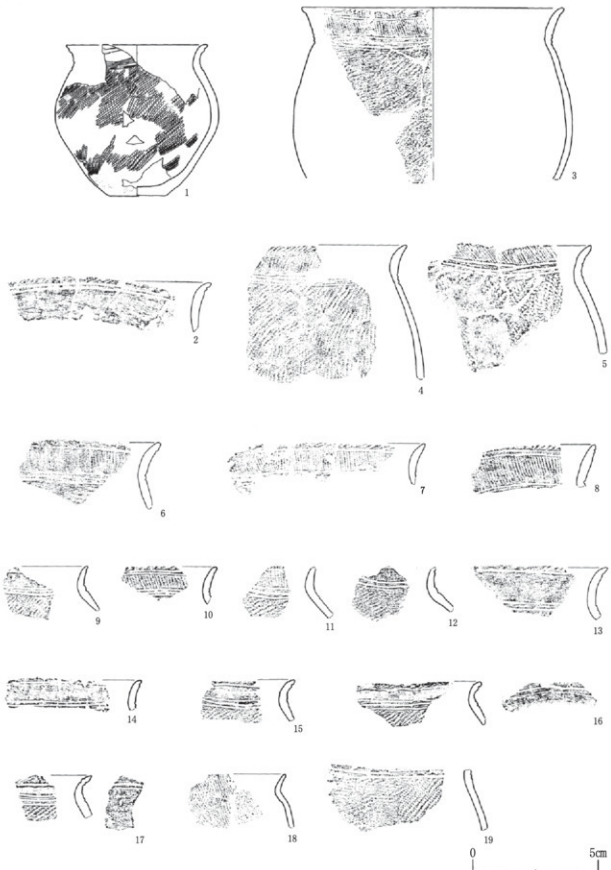
Ｅａ類(第25図68、第31図205～208)盤形のもの。上面に同心円状の沈線が施されるものが多い。205は上面に５重の同心円状の沈線が、側面には６条の平行沈線が施される。側面には小孔が穿たれているが、２孔１対であった可能性もある。206は上面に同心円状に沈線が密に施されている。側面には３条の平行沈線が施されている。207は盤形の蓋形土器である。上面には沈線と刺突によって文様が施されている。208は上面に３重の同心円状の沈線が施されている。縁辺部には近接して２個の小孔が穿たれているため、本来は２孔１対であったと推定できる。

Ｅｂ類(第22図38～43、第25図69、第31図209～214)笠形のもので、つまみ部上面は入念に磨かれ、中央部は縁辺部に比べやや窪むものが多い。209～212はつまみ部と体部との境界に平行沈線が施されている。211は頸部に朱が付着している。

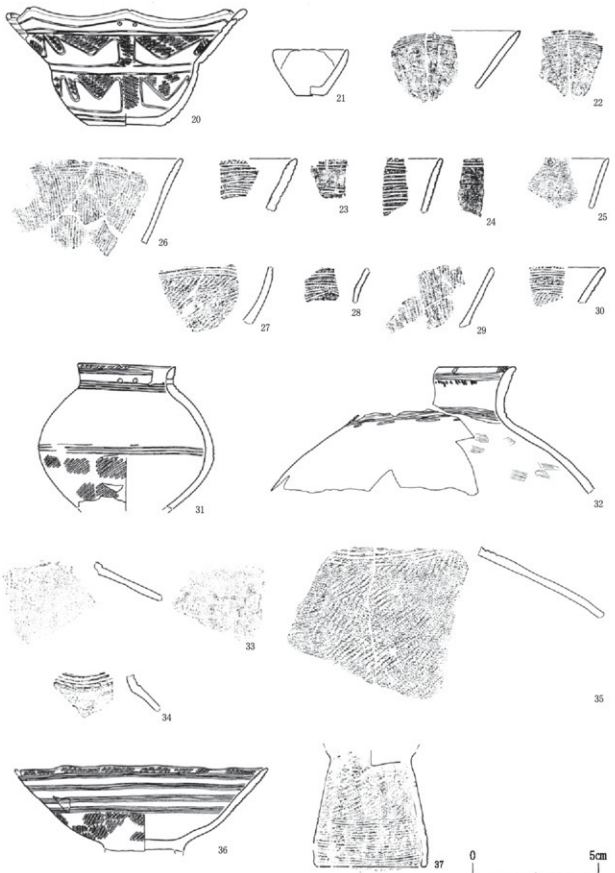
Ｅｃ類(第22図44、第31図215)板状のもの。215は無文の板状の蓋形土器である。側面は整形がなされている。１対の小孔が穿たれている。裏面には籾痕状の圧痕が２ヵ所にみられる。

Ｆ類　器種不明の胴部、底部を一括した。

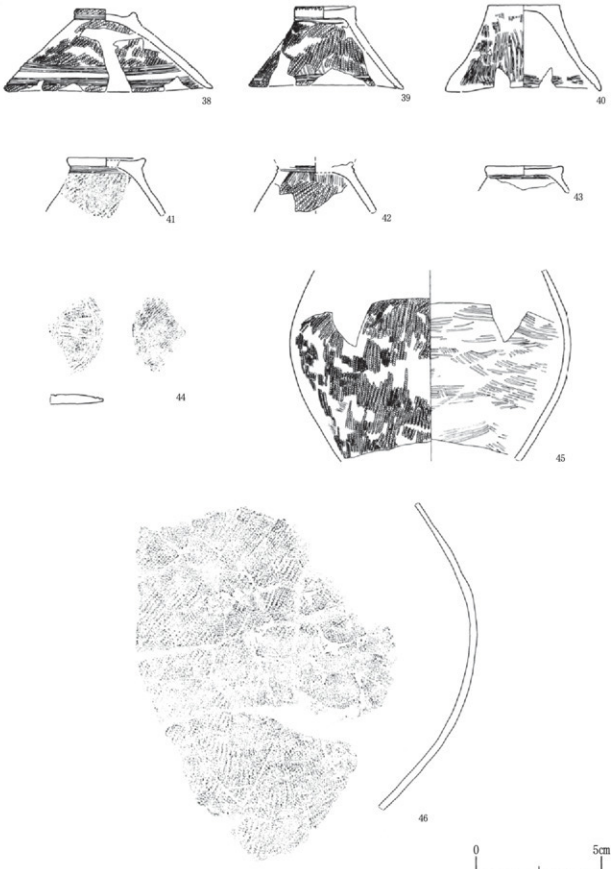
(第22図45・46、第23図47～60、第25図70・71、76～78、第26図96～99、第39図216～227)



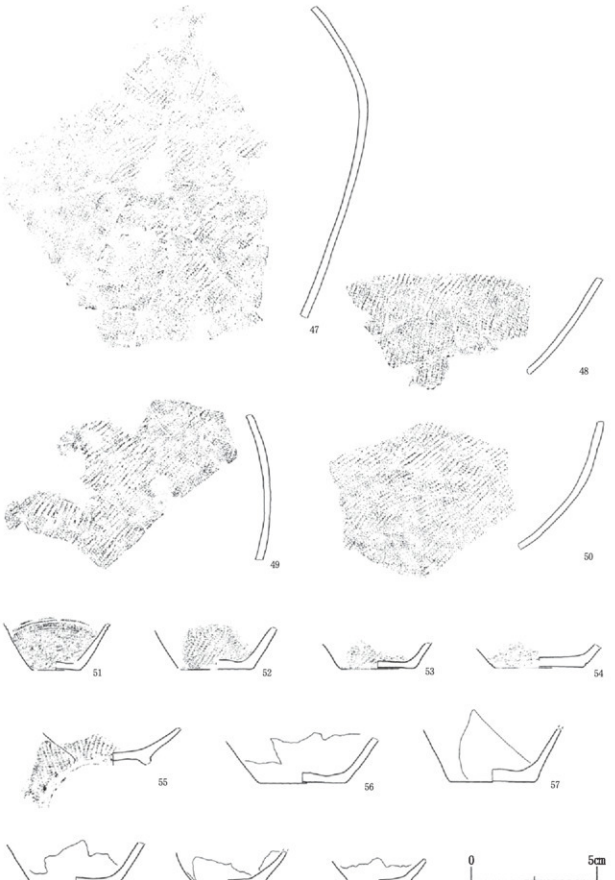
第20図　ＳＫ01出土土器



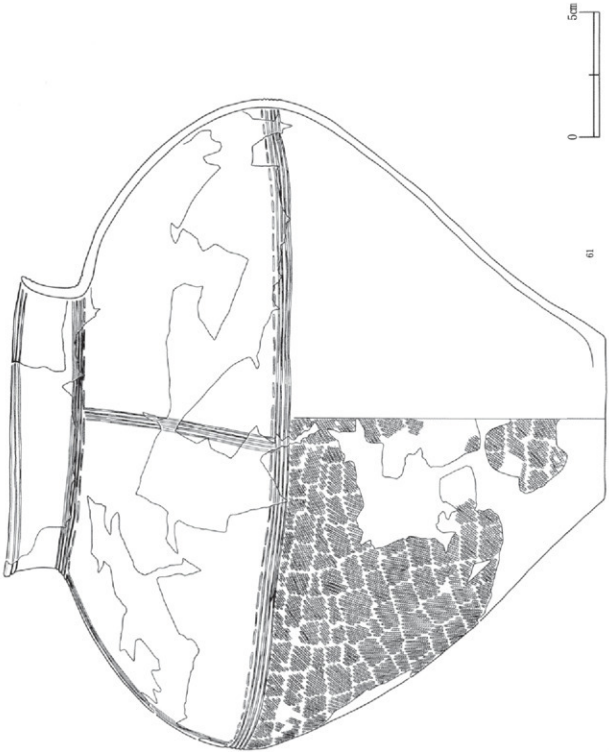
第21図　ＳＫ01出土土器



第22図　ＳＫ01出土土器

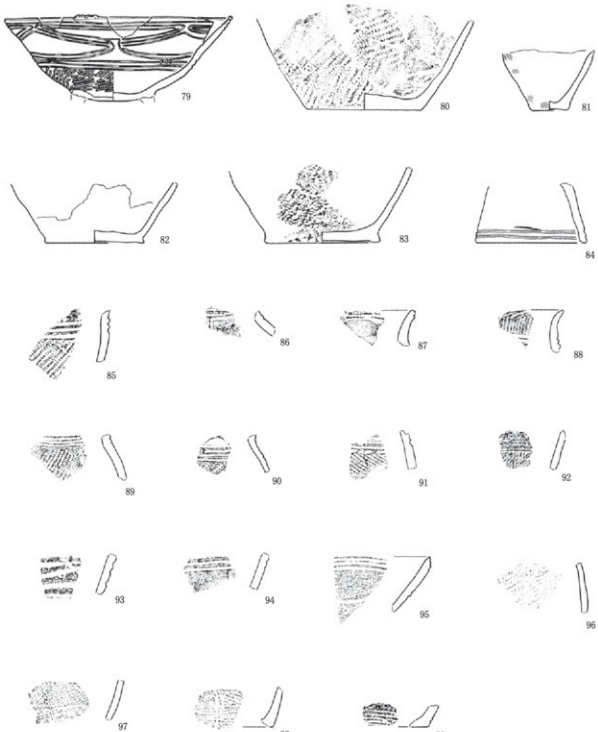


第23図　ＳＫ01出土土器

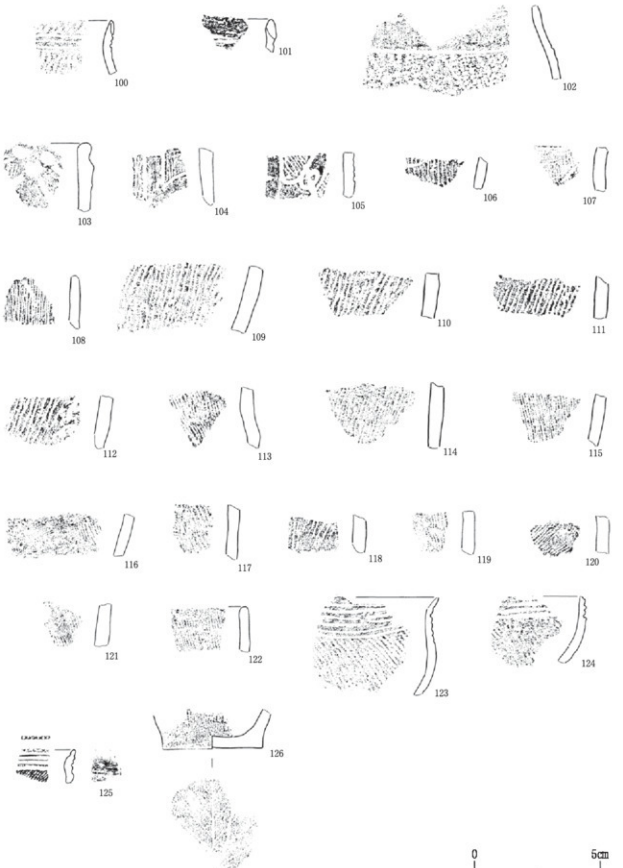


第24図　ＳＫ02出土土器

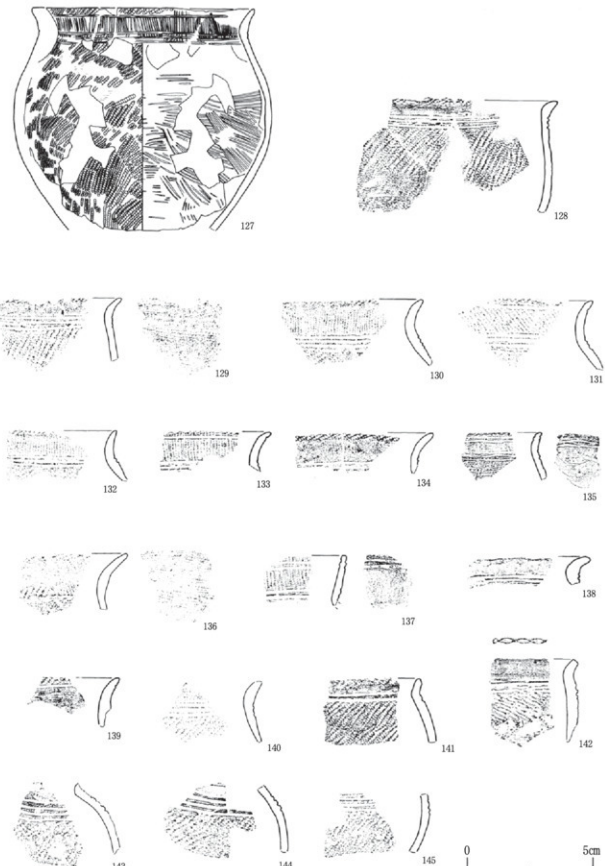
第25図　ＳＫ02・11・31出土土器、ＳＫ30出土石器



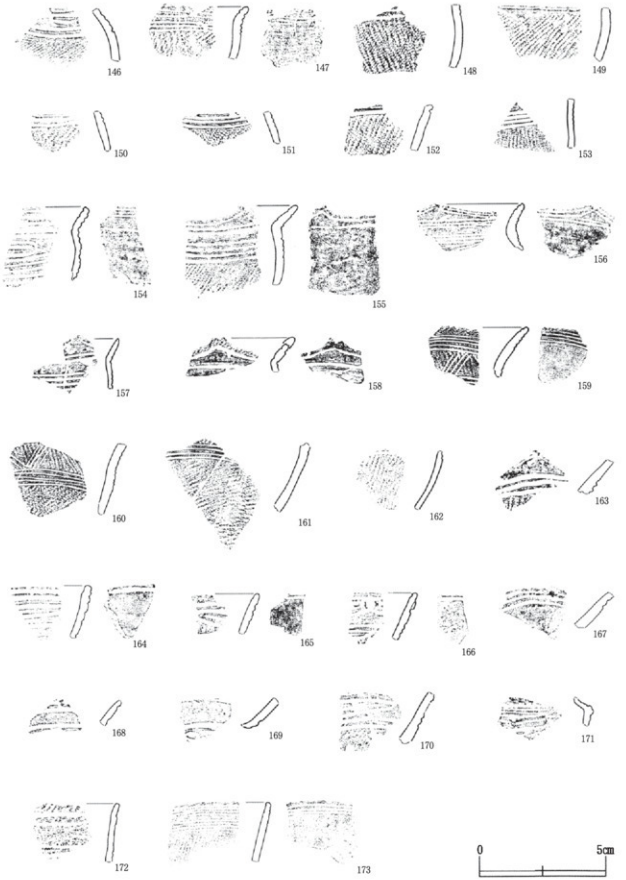
第26図　ＳＫ290・291・353、ＳＲ13・14、ＳＤ09・19・22・23出土土器



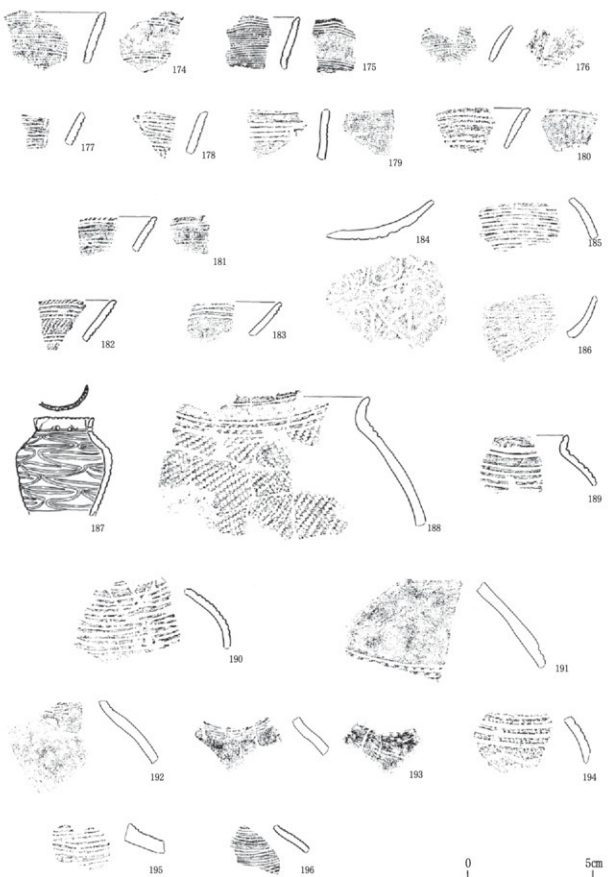
第27図　遺構外出土土器(１)



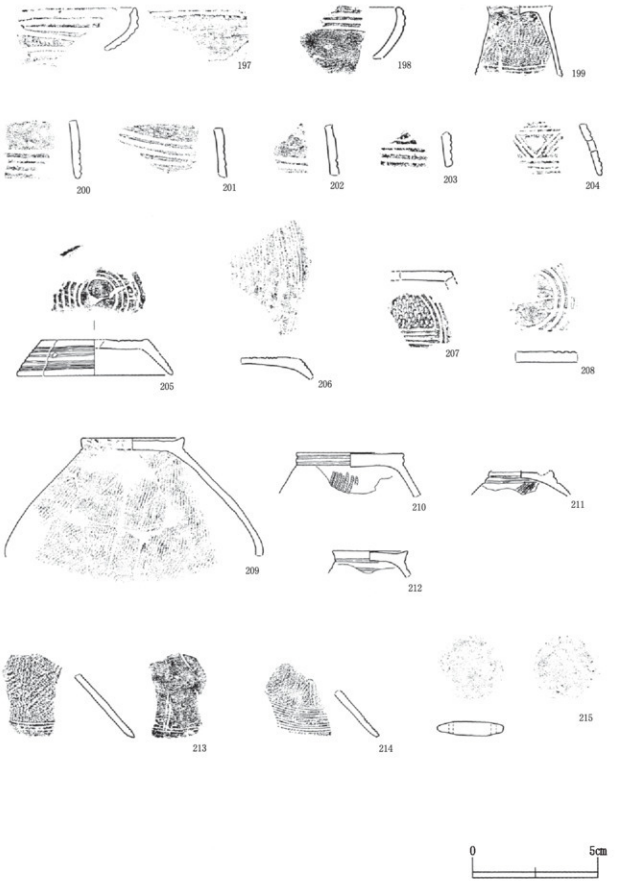
第28図　遺構外出土土器(２)



第29図　遺構外出土土器(３)



第30図　遺構外出土土器（４）



第31図　遺構外出土土器(５)

第32図　遺構外出土土器(６)

第３表　土器観察表(１)

掲図番号	図版番号	出土位置	層位	分類	法量(cm) 器高	最大径	底径	調整・施文	備考
20-1	19-1	ＳＫ01	堆積土	Ａ	12.0	12.9	4.5	刷毛目(横)→ＬＲ(横・斜め)→沈線◎内面:磨き(入念)	口径11.2cm
20-2	22-2	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線 ◎内面：磨き(横)	
20-3	22-3	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部は刷毛目(縦)→ＬＲ(横)→沈線、胴部は刷毛目(横)→ＬＲ(横・縦) ◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横・雑) ※内面の磨きは雑で多くの刷毛目が残る	
20-4	22-4	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部は刷毛目(縦)→ＬＲ(横)→沈線、胴部は刷毛目(横)→ＬＲ(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
20-5	22-5	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→沈線、胴部は刷毛目(横)→ＬＲ(横・斜め) ◎内面：磨き(横・入念)	
20-6	22-6	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(縦)→ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
20-7	22-7	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(縦)→ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
20-8	22-8	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(縦)→ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：磨き(摩滅気味)	
20-9	22-9	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：頸部は刷毛目(縦)→磨き？→沈線、胴部は刷毛目(横)→ＬＲ(横) ◎内面：磨き	
20-10	22-10	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁は刷毛目(縦)、ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：磨き(横・入念)	
20-11	22-11	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁は刷毛目(縦)、頸部～胴部は刷毛目(横)→ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	焼成良好
20-12	22-12	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→磨き(横)→沈線、胴部は刷毛目(横)→ＬＲ(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
20-13	22-13	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：磨き(横)→縄文→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
20-14	22-14	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(縦)→磨き(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
20-15	22-15	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→磨き(横)→縄文→沈線、胴部はＬＲ(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線 ※沈線(不明瞭)	
20-16	22-16	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→磨き→縄文→沈線、胴部はＬＲ(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線	
20-17	22-17	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→縄文→磨き(横)→沈線、胴部は刷毛目(横)→ＬＲ(横) ◎内面：磨き→沈線	
20-18	22-18	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(縦・斜め)→磨き(横) ◎内面：磨き(横)	
20-19	22-19	ＳＫ01	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(横)→ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
21-20	18-20	ＳＫ01	堆積土	Ｂｂ	7.7	19.5	6.0	◎外面：ＬＲ(縦・斜め)→沈線→磨き ◎内面：磨き(横・入念)→沈線 ※口縁波長部に短沈線	穿孔あり
21-21	—	ＳＫ01	堆積土	Ｂｄ				◎外面：不明(摩滅気味) ◎内面：磨き(雑)	胎土に砂礫多く含む
21-22	23-22	ＳＫ01	堆積土	Ｂｄ				◎外面：刷毛目(縦)→磨き(縦)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線	
21-23	23-23	ＳＫ01	堆積土	Ｂｄ				◎外面：磨き(横)→ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線	内面にも多数の沈線
21-24	23-24	ＳＫ01	堆積土	Ｂｄ				◎外面：磨き(横)→縄文→沈線 ◎内面：磨き(横)→沈線	
21-25	23-25	ＳＫ01	堆積土	Ｂｄ				◎外面：刷毛目(横・斜め)→磨き ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
21-26	23-26	ＳＫ01	堆積土	Ｂｄ				◎外面：刷毛目(縦)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→沈線→磨き(横) ※内面の口縁部付近は磨かれない	
21-27	23-27	ＳＫ01	堆積土	Ｂｃ				◎外面：刷毛目(縦・横)→沈線・ＬＲ(横)→刺突 ◎内面：磨き(横・斜め)	確認調査と接合
21-28	23-28	ＳＫ01	堆積土	Ｂｅ				◎外面：磨き(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→沈線	
21-29	23-29	ＳＫ01	堆積土	Ｂｄ				◎外面：刷毛目(縦) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
21-30	23-30	ＳＫ01	堆積土	Ｂｄ				◎外面：刷毛目(斜め)→縄文→磨き→沈線 ◎内面：磨き(横)	

第４表　土器観察表(２)

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	分類	法量(cm) 器高	最大径	底径	調整・施文	備考
21-31	18-31	ＳＫ01	堆積土	Ｃｃ		14.0		◎外面：口縁部～胴部上半部は縄文・刷毛目(横)→磨き(横・斜め)→沈線、胴部下半部は刷毛目(横・斜め)→ＲＬ(縦)　◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横)、胴部下半部は磨きが雑である	２つ１組の穿孔が１対(計４ヶ所)。口径7.8cm
21-32	18-32	ＳＫ01	堆積土	Ｃｃ				◎外面：口縁部は刷毛目(縦)→磨き(横)→ＬＲ(横)→沈線、頸部～肩部は刷毛目(横)→磨き(横)→沈線・列点　◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横)	口径12.8cm
21-33	23-33	ＳＫ01	堆積土	Ｃｃ				◎外面：磨き→沈線・列点　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
21-34	23-34	ＳＫ01	堆積土	Ｃｃ				◎外面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線・列点 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
21-35	23-35	ＳＫ01	堆積土	Ｃｄ				◎外面：刷毛目(横)→ＬＲ(横)→沈線・列点 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
21-36	18-36	ＳＫ01	堆積土	Ｄｂ				◎外面：刷毛目(口縁部・縦)→ＬＲ(横)→磨き(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線	
21-37	19-37	ＳＫ01	堆積土	Ｄｄ			8.8	◎外面：刷毛目(縦)→ＬＲ(横)→沈線(横)→一部磨き　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)　※外面の刷毛目多く残る	補修孔あり
22-38	19-38	ＳＫ01	堆積土	Ｅｂ	7.2	15.4		◎外面：刷毛目(横・斜め)→ＬＲ(横・斜め)→磨き(横)→沈線 ◎内面：磨き(横・斜め)	天径4.6cm
22-39	—	ＳＫ01	堆積土	Ｅｂ	6.4	11.6		◎外面：刷毛目(斜め)→ＬＲ(横・斜め)→沈線、つまみ部は磨き→ＬＲ(横)・沈線　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	天径4.8cm
22-40	19-40	ＳＫ01	堆積土	Ｅｂ	6.8	12.2		◎外面：刷毛目(縦・斜め・一部横)　◎内面：刷毛目(横)→磨き→沈線(横)	天径5.6cm
22-41	19-41	ＳＫ01	堆積土	Ｅｂ			6.2	◎外面：ＬＲ(横)→沈線、つまみ部上面は磨き　◎内面：磨き(横)	
22-42	19-42	ＳＫ01	堆積土	Ｅｂ				◎外面：刷毛目(縦)→LR(横)◎内面：刷毛目(縦)→磨き(横)	
22-43	19-43	ＳＫ01	堆積土	Ｅｂ				◎外面：沈線、つまみ部上面は磨き　◎内面：磨き	
22-44	22-44	ＳＫ01	堆積土	Ｅｃ	0.8			◎表面：刷毛目→磨き(雑)→沈線　◎裏面：刷毛目→磨き(雑)	
22-45	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(斜め・縦)→ＬＲ(横・斜め)◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横・斜め)	内面に刷毛目痕多く残る
22-46	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(横・斜め)→ＬＲ(横・斜め)◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横・斜め)	内面に刷毛目痕多く残る
23-47	22-47	ＳＫ01	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(斜め)→ＬＲ(横)◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横)	
23-48	22-48	ＳＫ01	堆積土	Ｆ				47と同一個体	
23-49	22-49	ＳＫ01	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(横)→ＬＲ(横)◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横・斜め)	
23-50	22-50	ＳＫ01	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(横・斜め)→ＬＲ(横)　◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横・斜め)	
23-51	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			3.8	◎外面：刷毛目(横)→ＬＲ(横)→沈線　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
23-52	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			6.0	◎外面：刷毛目(斜め)→LR(横)　◎内面：磨き(横)◎底面：磨き	
23-53	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			5.8	◎外面：上面は刷毛目→磨き、側面は刷毛目(斜め)◎内面：磨き	
23-54	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			7.0	◎外面：側面は刷毛目(斜め)→ＬＲ(横)◎底面：磨き◎内面：磨き	
23-55	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ				◎外面：ＬＲ(横・斜め)→沈線(横)　◎内面：磨き(入念)　※胴部と台部の境目に沈線	外面に一部炭が付着
23-56	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			6.8	◎外面：刷毛目(横)→磨き(横)◎内面：磨き(横)	砂礫やや多く含む
23-57	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			6.7	◎外面・内面：磨き(横)	底部に炭化物付着
23-58	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			6.2	◎外面：刷毛目(横)→縄文(不明瞭)◎内面：磨き	
23-59	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			5.0	◎外面：摩滅　◎内面：磨き(横)	
23-60	—	ＳＫ01	堆積土	Ｆ			4.2	◎外面：摩滅　◎内面：不明(磨き？)	
24-61	22-61	ＳＫ02	堆積土	Ｃｃ	46.7	51.2	12.6	◎外面：刷毛目→縄文(ＬＲ・横)→磨き(横・縦)→沈線(横)→沈線(縦)→列点、※刷毛目は口縁部～頸部が縦、胴部が横・斜め　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	口径24cm
25-62	23-62	ＳＫ02	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→沈線、胴部はＬＲ(横)◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	

第５表　土器観察表(３)

掛図番号	図版番号	出土位置	層位	分類	法量(cm) 器高	最大径	底径	調整・施文	備考
25-63	22-62	ＳＫ02	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(縦)・ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
25-64	23-63	ＳＫ02	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)・ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
25-65	22-63	ＳＫ02	堆積土	Ａ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)・縄文→沈線、胴部はＬＲ(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
25-66	23-64	ＳＫ02	堆積土	Ａ				◎外面：頸部は沈線、胴部はＬＲ(横)→列点 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
25-67	22-64	ＳＫ02	堆積土	Ｂｄ				◎外面：磨き→LR(横)→沈線　◎内面：磨き→沈線	
25-68	19-68	ＳＫ02	堆積土	Ｅａ			11.8	◎外面：上面は磨き→沈線、側面は刷毛目→磨き→沈線→刺み(短沈線)　◎内面：上面は刷毛目→磨き、側面は刷毛目(横)→磨き(横)	天径11.8cm
25-69	19-69	ＳＫ02	堆積土	Ｅｂ	6.8			◎外面：縄文→沈線(調整は摩滅により不明) ◎内面：刷毛目→磨き　※つまみ部、内面にそれぞれ2条の沈線	天径5.6cm
25-70	—	ＳＫ02	堆積土	Ｆ		17.0	6.0	◎外面：側面　刷毛目→縄文(不明瞭) ◎内面：磨き	
25-71	23-71	ＳＫ02	堆積土	Ｆ			8.8	◎外面：磨き ◎内面：磨き	
25-72	24-72	ＳＫ11	堆積土	Ａ			6.4	◎外面：刷毛目(斜め)→ＬＲ(横),底面は磨き(入念) ◎内面：磨き(底部は雑)	内面に炭化物付着
25-73	24-73	ＳＫ11	堆積土	Ｆ				◎外面：口縁部は磨き(横)、胴部は刷毛目(横)→ＲＬ(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
25-74	23-74	ＳＫ11	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(横)→ＬＲ(斜め)→沈線 ◎内面：刷毛目(斜め)→磨き(横)	
25-75	24-75	ＳＫ11	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(斜め)→ＬＲ(横) ◎内面：磨き	内面に炭化物付着
25-76	24-76	ＳＫ31	堆積土	Ｆ				◎外面：頸部は磨き→沈線、胴部はＬＲ(横) ◎内面：磨き(横)	
25-77	23-77	ＳＫ31	堆積土	Ｆ				◎外面：ＬＲ(横) ◎内面：磨き(横)	
25-78	24-78	ＳＫ31	堆積土	Ｆ			10.0	◎外面:LR(横)・磨き　◎内面:磨き　◎底面:磨き	
26-79	20-79	ＳＫ291	堆積土	Ｄｃ		17.8		◎外面：胴部上半部は磨き→沈線、胴部下半部はＲＬ(縦・斜め) ◎内面：磨き→沈線 ※全体的に摩滅気味	砂礫多く含む
26-80	20-80	ＳＫ291	堆積土	Ｆ			9.0	◎外面：刷毛目(斜め)→LR(横),底面は磨き(入念) ◎内面：磨き(底面は雑)	外面に炭化物付着
26-81	20-81	ＳＫ291･353	堆積土	Ｂ			2.8	◎外面：刷毛目(斜め) ◎内面：刷毛目(斜め) ※内面に輪積み痕あり	
26-82	20-82	ＳＲ13下	堆積土	Ｆ			7.8	◎内面：ナデ	砂礫多く含む
26-83	20-83	ＳＲ13上	堆積土	Ｆ			8.6	◎外面：ＲＬ(縦)、底部のくびれ付近に指紋付着 ◎内面：磨き	砂礫多く含む
26-84	20-84	ＳＲ14	堆積土	Ｄｄ			8.8	◎外面：磨き(横)→沈線 ◎内面：磨き(横)	
26-85	24-85	ＳＤ09	堆積土	Ａ				◎外面:LR(横)→磨き(横)→沈線 ◎内面:磨き(横)	焼成良好
26-86	24-86	ＳＤ19	堆積土	Ｃｃ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	
26-87	24-87	ＳＤ20	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(縦)→磨き(横)→沈線→縄文 ◎内面：磨き(横)	
26-88	24-88	ＳＤ23	堆積土	Ａ				◎外面：刷毛目(縦)→ＬＲ(横)・沈線 ◎内面：磨き(横)	
26-89	24-89	ＳＤ23	堆積土	Ａ				◎外面：頸部は磨き(横)→沈線、胴部は刷毛目(横)→ＬＲ(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
26-90	24-90	ＳＤ23	堆積土	Ａ				◎外面：頸部は刷毛目(横)→磨き(横)→沈線、胴部はＬＲ(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
26-91	24-91	ＳＤ23	堆積土	Ａ				◎外面：頸部は沈線、胴部はＲＬ(横)→列点 ◎内面：摩滅 ※列点には木目痕あり	
26-92	24-92	ＳＤ23	堆積土	Ｂｄ				◎外面：縄文→沈線 ◎内面：磨き(横)	
26-93	24-93	ＳＤ23	堆積土	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き(横)	
26-94	24-94	ＳＤ23	堆積土	Ｂｄ				◎外面：沈線 ※その他摩滅により不明	
26-95	24-95	ＳＤ23	堆積土	Ｂｄ				◎外面：沈線 ◎内面：磨き ※砂礫が多く混入するため、内・外面ともざらつく。	金雲母多く混入
26-96	24-96	ＳＤ23	堆積土	Ｆ				◎外面：ＬＲ(横) ◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横)	
26-97	24-97	ＳＤ23	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(横)→縄文 ◎内面：刷毛目(斜め)→磨き(横)	
26-98	24-98	ＳＤ23	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(斜め)→ＬＲ(斜め) ◎内面：磨き(横)	
26-99	24-99	ＳＤ23	堆積土	Ｆ				◎外面：刷毛目(斜め) ◎内面：磨き ※底面に沈線状の圧痕あり	
27-100	25-100	ＬＭ64	Ⅱ	Ｉａ				◎外面：ＬＲ(横)→磨き→沈線 ◎内面：磨き(横)	折り返し口縁
27-101	25-101	ＬＭ63	Ⅲ	Ｉａ				◎外面:沈線(摩滅により不明瞭) ◎内面:磨き(横)	折り返し口縁

第６表　土器観察表(４)

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	分類	法量(cm) 器高	最大径	底径	調整・施文	備考
27-102	25-102	L O52	Ⅰ	Ⅰc				◎外面：磨き→沈線→RL(斜め)　◎内面：ナデ(横)	
27-103	25-103	L M63	Ⅰ	Ⅰb				◎外面：縄文・沈線・刺突◎内面：磨き	砂礫多く含む
27-104	25-104	L L67	Ⅱ	Ⅰc				◎外面：短軸絡条体→磨き→沈線　◎内面：磨き	
27-105	25-105	—	Ⅰ	Ⅰc				◎外面：L短軸絡条体(斜め)→磨き→沈線　◎内面：磨き	
27-106	25-106	L O67	Ⅰ	Ⅰc				◎外面：L短軸絡条体(縦)　◎内面：磨き	
27-107	25-107	L L67	Ⅱ	Ⅰc				◎外面：R短軸絡条体(縦)→沈線　◎内面：磨き	
27-108	25-108	LO･LN67	Ⅱ	Ⅰc				◎外面：R短軸絡条体(縦)　◎内面：磨き	
27-109	25-109	L N67	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：L短軸絡条体(縦・斜め)　◎内面：磨き	
27-110	25-110	L O67	Ⅰ	Ⅰd				◎外面：L短軸絡条体(縦・斜め)　◎内面：磨き	
27-111	25-111	L M67	Ⅰ	Ⅰd				◎外面：L短軸絡条体(縦・斜め)　◎内面：磨き	
27-112	25-112	L N66	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：L短軸絡条体(斜め)　◎内面：磨き	
27-113	25-113	L L67	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：R短軸絡条体(縦・斜め)　◎内面：磨き	
27-114	25-114	L L62	Ⅰ	Ⅰd				◎外面：L短軸絡条体(斜め)　◎内面：磨き	
27-115	25-115	LO･LN67	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：R短軸絡条体(縦)　◎内面：磨き	
27-116	25-116	LO･LN67	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：R短軸絡条体(斜め)　◎内面：磨き	
27-117	25-117	L M67	Ⅰ	Ⅰd				◎外面：R短軸絡条体(斜め)　◎内面：磨き	
27-118	25-118	L O67	Ⅰ	Ⅰd				◎外面：L短軸絡条体(斜め)　◎内面：磨き	
27-119	25-119	L O67	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：R短軸絡条体(縦)　◎内面：磨き(入念)	
27-120	25-120	L L67	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：R短軸絡条体(斜め)　◎内面：磨き(入念)	
27-121	25-121	L L67	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：R短軸絡条体(斜め)　◎内面：磨き(入念)	
27-122	25-122	LO･LN67	Ⅱ	Ⅰd				◎外面：短軸絡条体(縦)◎内面：磨き	砂礫多く含む
27-123	25-123	L L63	Ⅰ～Ⅲ	Ⅱa				◎外面：RL(横)→磨き→沈線　◎内面：磨き	
27-124	25-124	L L63	Ⅰ～Ⅲ	Ⅱa				◎外面：沈線(摩滅により不明瞭)	133と同一個体
27-125	25-125	L L64	Ⅰ～Ⅲ	Ⅱb				◎外面：口縁部～頸部は磨き→沈線・刺突、胴部はLR(横)◎内面：磨き(横)	
27-126	25-126	LM63	Ⅰ	Ⅰ					底面に木葉痕
28-127	25-127	LQ51･52	倒木痕	A			20.2	◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→LR(横)→沈線、胴部は刷毛目(横・斜め)→LR(横)◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横・斜め)※内面最大径部分に刷毛目多く残る	
28-128	25-128	L O55	Ⅱ～Ⅲ	A				◎外面：口縁部～頸部は磨き(横)→LR(横)→沈線、胴部はLR(横)◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	外面に炭化物付着
28-129	25-129	LO･LP55	Ⅰ	A				◎外面：口縁部～頸部は磨き→LR(横)→沈線、胴部はLR(横)　◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横)	
28-130	25-130	L O54	Ⅱ～Ⅲ	A				◎外面：刷毛目(縦)→縄文・沈線、摩滅気味　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
28-131	25-131	L O53	Ⅲ	A				◎外面：刷毛目(斜め)→縄文・沈線　◎内面：磨き(横)※摩滅気味	
28-132	25-132	L O54	Ⅱ～Ⅲ	A				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→LR(横)→沈線、胴部は刷毛目(横)→LR(横)◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横)	
28-133	25-133	LQ51･52	倒木痕	A				◎外面：刷毛目(縦)→縄文・沈線　◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(横)	
28-134	25-134	L M59	Ⅲ	A				◎外面：刷毛目(斜め)→LR(横)→沈線　◎内面：磨き(横)	刷毛目細い
28-135	25-135	確認調査	排土	A				◎外面：磨き→LR(斜め)・沈線　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線	
28-136	25-136	L N56	Ⅱ	A				◎外面：刷毛目(斜め)→LR(横)◎内面：刷毛目(横)→磨き(横・雑)	外面に炭化物付着
28-137	25-137	確認調査	Ⅰ	A				◎外面：RL(斜め)→沈線◎内面：磨き(横)→沈線	内面に炭化物付着
28-138	25-138	MB43	カクラン	A				◎外面：刷毛目(横)→磨き(横)→沈線　◎内面：磨き(横)	
28-139	25-139	確認調査	Ⅰ	A				◎外面：磨き(横)･LR(横)→沈線　◎内面：磨き(横)	
28-141	25-141	LQ51･52	倒木痕	A				◎外面：ナデ(横)→沈線→LR(横)◎内面：磨き(横)	
28-142	25-142	確認調査	排土	A				◎外面：ナデ(横)→沈線→刺突・縄文　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)※口縁上端に圧痕あり	焼成良好
28-143	25-143	確認調査	Ⅰ	A				◎外面：頸部は磨き(横)→沈線・LR(横)◎内面：磨き(横・斜め)	144と145と同一個体
28-144	25-144	L P52	Ⅰ	A				143と同じ	143･145と同一個体
29-145	25-147	確認調査	Ⅰ	A				143と同じ	143･144と同一個体
28-146	25-145	確認調査	排土	A				◎外面：磨き(横)→沈線･LR(横)　◎内面：磨き(横)	

第７表　土器観察表(５)

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	分類	法量(cm) 器高	最大径	底径	調整・施文	備考
29-147	25-146	ＬＯ57	Ⅰ	Ａ				◎外面：磨き→沈線→縄文　◎内面：磨き(横)→沈線	
29-148	25-148	ＭＡ45	Ⅰ	Ａ				◎外面:RL(横)→沈線　◎内面:刷毛目(横)→磨き	
29-149	25-149	ＬＯ57	Ⅰ	Ａ				◎外面：沈線・ＬＲ(横)◎内面：磨き(摩滅気味)	
29-150	25-150	ＬＯ52	Ⅰ	Ａ				◎外面：沈線→ＬＲ(横)◎内面：磨き	
29-151	25-151	ＭＡ45	Ⅰ	Ａ				◎外面：磨き→沈線・LR(横)◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
29-152	25-152	ＬＯ57	Ⅰ	Ａ				◎外面：ＬＲ(横)→沈線　◎内面：磨き	
29-153	25-153	確認調査	Ⅰ	Ａ				◎外面：頸部は磨き→沈線、胴部はＬＲ(斜め)◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
29-154	25-154	ＬＯ57	Ⅰ	Ｂａ				◎外面：磨き→沈線◎内面：磨き(横)→沈線	
29-155	25-155	ＬＯ56	Ⅱ	Ｂａ				◎外面：口縁部～頸部は磨き→沈線、胴部はＬＲ(横)◎内面：磨き→沈線	
29-156	25-156	ＬＰ54	Ⅱ～Ⅲ	Ｂａ				◎外面：沈線、摩滅気味◎内面：磨き(横)→沈線	
29-157	25-157	確認調査	Ⅰ	Ｂａ				◎外面:磨き(横)→沈線　◎内面:摩滅により不明瞭	
29-158	25-158	LQ51･52	倒木痕	Ｂａ				◎外面：磨き(横)→ＬＲ(横)→沈線 ◎内面：磨き→沈線	
29-159	25-159	確認調査	Ⅰ	Ｂｅ				◎外面：ＬＲ(横・縦)→磨き→沈線　◎内面：磨き(横)→沈線	160と同一個体
29-160	25-160	確認調査	Ⅰ	Ｂｅ				159と同じ	159と同一個体
29-161	25-161	確認調査	Ⅰ	Ｂｃ				◎外面：磨き→沈線・ＬＲ(横)◎内面：磨き(横)	
29-162	25-162	確認調査	Ⅰ	Ｂｃ				◎外面:沈線･LR(横)　◎内面:摩滅により不明瞭	
29-163	25-163	ＬＮ57	Ⅱ	Ｂ				◎外面：磨き→沈線・ＲＬ(縦)◎内面：磨き(横)	
29-164	25-164	ＬＭ64	Ⅱ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線◎内面：磨き(横)→沈線	
29-165	25-165	ＭＢ56	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：磨き・ＬＲ(横)→沈線◎内面：磨き(横・入念)→沈線	
29-166	25-166	ＭＢ54	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：貼り瘤→磨き→沈線　◎内面：磨き(横・入念)→沈線	
29-167	25-167	ＬＯ57	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面:貼り瘤→磨き→沈線　◎内面:磨き→沈線	
29-168	25-168	ＬＯ57	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線◎内面：磨き(入念)	
29-169	25-169	ＬＯ57	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線◎内面：磨き(横・入念)	金雲母含む
29-170	25-170	ＬＰ52	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：沈線・縄文(摩滅により不明瞭)◎内面：磨き(横・入念)	
29-171	25-171	ＬＭ66	Ⅱ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線→刺突◎内面：磨き(横)	
29-172	25-172	ＭＡ45	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：ＬＲ(横)→沈線◎内面：磨き	
29-173	25-173	ＬＳ46	倒木痕	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線・ＬＲ(横)◎内面：磨き(横)→沈線	
30-174	25-174	ＬＯ54	Ⅱ～Ⅲ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線◎内面：磨き→沈線 ※口縁波頂部に刺突あり	
30-175	25-175	ＬＰ55～ＬＱ55	Ⅱｃ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線・ＬＲ(横)◎内面：磨き(横)→沈線	
30-176	25-176	—	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線　◎内面：刷毛目(横) ※その他摩滅のため不明瞭	
30-177	25-177	ＬＯ52	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線◎内面：磨き	
30-178	25-178	ＬＯ54	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面:磨き→沈線　◎内面:刷毛目(横)→磨き(横)	
30-179	25-179	確認調査	Ⅱ	Ｂｄ				◎外面：磨き→沈線・縄文(摩滅気味)　◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
30-180	25-180	ＬＯ57	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面：沈線(その他摩滅により不明瞭)◎内面：磨き→沈線	
30-181	25-181	ＬＯ52	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面:磨き･縄文→沈線　◎内面:磨き(横･入念)→沈線	
30-182	25-182	確認調査	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面:LR(横)→沈線･刺突　◎内面:刷毛目(横)→磨き	
30-183	25-183	ＬＯ52	Ⅰ	Ｂｄ				◎外面:磨き→沈線　◎内面:刷毛目(横)→磨き(横)	
30-184	25-184	ＬＮ56	Ⅱ	Ｂｆ				◎外面：磨き→沈線◎内面：磨き	
30-185	25-185	ＬＳ46	倒木痕	Ｃｇ				◎外面：磨き→沈線◎内面：磨き(横)	186と同一個体
30-186	25-186	ＬＳ46	倒木痕	Ｃｇ				◎外面：磨き→沈線・縄文(摩滅気味)◎内面：磨き(横)	185と同一個体
30-187	25-187	ＬＯ53	倒木痕	Ｃａ				◎外面:磨き→沈線　◎内面:刷毛目(横)→磨き(雑) ※輪積み痕残る	砂礫多く含む、穿孔あり、口径4.8cm

第８表　土器観察表(６)

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	分類	法量(cm) 器高	最大径	底径	調整・施文	備考
30-188	25-188	ＬＯ57	Ⅰ	Ｃｂ				◎外面：口縁部～頸部は刷毛目(縦)→ＬＲ(横)→ナデ(横)→沈線、胴部は刷毛目(横・斜め)→LR(横) ◎内面：磨き(横・入念)	
30-189	25-189	ＬＮ67	Ⅱ～Ⅲ	Ｃｆ				◎外面：磨き(横・斜め)→沈線 ◎内面：磨き(横・入念)→沈線	
30-190	25-190	ＬＮ67	Ⅱ～Ⅲ	Ｃａ				◎外面：貼り瘤→磨き→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(雑)	
30-191	25-191	ＬＯ64	Ⅰ	Ｃｃ				◎外面：磨き→沈線→刺突 ◎内面：磨き(横)	
30-192	25-192	ＬＯ52	Ⅰ	Ｃｃ				◎外面：磨き→沈線・列点 ◎内面：磨き(横)	
30-193	25-193	ＬＯ54	Ⅰ	Ｃｃ				◎外面：磨き→沈線・列点 ◎内面：磨き(横)	
30-194	25-194	ＬＮ59	Ⅰ	Ｃｇ				◎外面：縄文→沈線 ◎内面：磨き	内外面に炭化物付着
30-195	25-195	ＭＤ44	Ⅰ	Ｃｆ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	
30-196	25-196	ＬＱ51	Ⅰ	Ｃｆ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き	
31-197	25-197	ＬＯ64	Ⅰ	Ｄａ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き(横)→沈線	
31-198	25-198	ＬＯ52	Ⅰ	Ｄａ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	
31-199	25-199	ＬＱ52	倒木痕	Ｄｄ				◎外面：ＬＲ(斜め・縦)→沈線 ◎内面：磨き	
31-200	25-200	ＬＯ55	Ⅱ～Ⅲ	Ｄｄ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	金雲母含む
31-201	25-201	確認調査	—	Ｄｄ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	金雲母含む
31-202	25-202	確認調査	Ⅰ	Ｄｄ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	金雲母含む
31-203	25-203	ＬＯ54	Ⅰ	Ｄｄ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	金雲母含む
31-204	25-204	ＭＣ44	Ⅰ	Ｄｄ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	透かし孔あり
31-205	25-205	ＬＭ63	Ⅰ	Ｅａ	2.8		8.4	◎外面：刷毛目→磨き→沈線 ◎内面：磨き(入念)	穿孔あり
31-206	25-206	ＭＢ43	Ⅰ	Ｅａ			26.5	◎外面：沈線(その他摩滅で不明瞭)	
31-207	25-207	確認調査	—	Ｅａ				◎外面：磨き→沈線・刺突 ◎内面：磨き	
31-208	25-208	ＬＱ51	Ⅰ	Ｅａ				◎外面：磨き→沈線 ◎内面：磨き	
31-209	25-209	ＬＳ45	倒木痕	Ｅｂ			8.0	◎外面：刷毛目(横・斜め)→ＬＲ(横)→沈線、つまみ部上面は磨き(入念雲煙) ◎内面：磨き(横)	
31-210	25-210	ＬＯ56	Ⅱ	Ｅｂ			8.4	◎外面：つまみ部は磨き→沈線、胴部はLR(斜め) ◎内面：磨き(入念)	
31-211	25-211	ＬＰ52	Ⅰ	Ｅｂ				◎外面：つまみ部は磨き→沈線、胴部はＬＲ(横) ◎内面：摩滅	つまみ部に一部朱が付着
31-212	25-212	ＬＯ62	Ⅰ	Ｅｂ			5.8	◎外面：磨き→沈線、上面は磨き(入念) ◎内面：磨き	
31-213	25-213	ＬＱ51･52	倒木痕	Ｅｂ				◎外面：ＲＬ(縦)・沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
31-214	25-214	ＬＱ51	Ⅰ	Ｅｂ				◎外面：磨き→沈線・LR(横) ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	
31-215	25-215	ＬＯ56	Ⅰ	Ｅｃ	1.1	5.3		◎表面：磨き ◎裏面：磨きなし	裏面に籾状の圧痕あり
32-216	—	ＬＱ51･52	倒木痕	Ｆ			5.4	◎外面：ＬＲ(横)・沈線 ◎内面：刷毛目(横)→磨き(横)	蓋の可能性あり
32-217	—	ＬＱ51･52	倒木痕	Ｆ			6.2	◎外面：刷毛目(斜め・横)→ＬＲ(横) ◎内面：磨き(横・入念)	
32-218	—	ＬＱ51･52	倒木痕	Ｆ			5.4	◎外面：刷毛目(斜め・横)→ＬＲ(横)、底面は刷毛目→磨き ◎内面：磨き(横・入念)	
32-219	—	ＬＳ45	倒木痕	Ｆ				◎外面：刷毛目(横・斜め)→ＬＲ(横) ◎内面：磨き(横・入念)	蓋の可能性あり
32-220	—	ＬＯ57	Ⅰ	Ｆ			8.0	◎外面：ＬＲ(横) ◎内面：磨き(横)	
32-221	—	ＬＴ46	倒木痕	Ｆ			6.2	◎外面：刷毛目(斜め) ◎内面：磨き	
32-222	—	ＬＯ52	Ⅰ	Ｆ			5.0	◎外面：刷毛目(斜め)→LR(横)、底面は磨き(入念) ◎内面：刷毛目(横・斜め)→磨き(入念)	
32-223	—	ＬＱ51	Ⅰ	Ｆ			7.8	◎外面：刷毛目(横)→ＬＲ(横)、底面は磨き ◎内面：磨き(入念)	外面に籾状の圧痕あり
32-224	—	ＬＮ56	Ⅱ	Ｆ			10.1	◎外面：刷毛目(横)→ＬＲ(横) ◎内面：磨き(横)	
32-225	—	ＬＮ56	Ⅱ	Ｆ			7.2	◎外面：ＬＲ(横) ◎内面：磨き(横)	外面に籾状の圧痕あり
32-226	—	ＬＮ56	Ⅱ	Ｆ			6.0	◎外面：磨き(横・入念)→ＬＲ(横) ◎内面：磨き(横・入念)	焼成良好
32-227	—	ＬＯ56	Ⅰ	Ｆ			5.2	◎外面：ＬＲ(横) ◎内面：ナデ	

（２）縄文時代・弥生時代の石器

本遺跡の石器は、縄文時代の土器の分布傾向(ほとんどが調査区北側から出土)や遺物量の少なさを考えると、弥生時代のものである可能性が高いといえる。剥片石器の石質は、ほとんどが珪質頁岩である。

石鏃(第33、34図Ｓ２～Ｓ63)

有茎鏃、無茎鏃、尖・円基鏃に大別され、中でも有茎鏃が多くを占める。それぞれ主剥離面を大きく残すものとそうでないものがある。

有茎鏃(Ｓ２～Ｓ42)は凸基有茎鏃がほとんどを占める。Ｓ２は石鏃としては大きな部類で石鋸のような機能が考えられる。有茎鏃の中で平基有茎鏃に近いものをあげるとすればＳ４、Ｓ７、Ｓ26、Ｓ27などがある。凹基有茎鏃はＳ35、Ｓ36で共に薄手の横長剥片を素材にしている。急角度の浅い調整によって側辺が作り出されているため、主剥離面を大きく残すのが特徴である。尖・円基鏃はＳ43～Ｓ55である。

無茎族は平基無茎鏃(Ｓ56～Ｓ58)、凹基無茎鏃(Ｓ59～Ｓ63)に細別される。凹基無茎鏃は抉入が大きいものと小さいものがある。

石錐(第34、35図Ｓ64～ Ｓ96)

つまみ部のあるもの(Ｓ64～Ｓ85)、棒状を呈するもの(Ｓ86～Ｓ96)にわけられる。つまみ部を有するものの中で刃部を丁寧に作り出しているものとして、Ｓ64、Ｓ68、Ｓ76、Ｓ79などがある。その他は、不定形の剥片の一部に簡単な調整を加えただけのものが多い。棒状のものは、柳葉形に近いものと寸詰まりのものとに分けられる。Ｓ96は石鏃の転用と考えられる。

削器(第36～39図Ｓ97～Ｓ150)

比較的緩い角度の刃部が連続的な細部調整により作り出されているものである。

Ｓ97～Ｓ123は両側辺に刃部を形成するものである。Ｓ97、Ｓ114は表裏面からの調整が顕著である。Ｓ119は両側辺の調整の角度が異なっている。急角度調整が施されている方の側辺はスクレイパー的な使用を受けたと考えられる。Ｓ120は自然面を残す大形の削器で連続的な細部調整が施される。Ｓ124～Ｓ150は片側辺に刃部を形成するものである。Ｓ140は側辺の抉入部に連続的な細部調整が施されている。自然面が残っているものとしてＳ97、Ｓ120、Ｓ122、Ｓ128～130、Ｓ132、Ｓ133、Ｓ135、Ｓ139、Ｓ142、Ｓ147、Ｓ148、150などがある。

スクレイパー(第40～42図Ｓ151～Ｓ182)

主に片面加工で刃部が急角度調整されるものである。縦長剥片を素材としているものが多い。

Ｓ151～157は素材の端部に刃部が作り出されている。Ｓ176、Ｓ181は素材の周縁に急角度の細部調整が施されている。Ｓ158、Ｓ160、Ｓ172、Ｓ176、Ｓ178には自然面が残されている。

石匙(第42図Ｓ183～186)

Ｓ183～185は、つまみ部を有し素材の側辺に連続的な細部調整が施されている。Ｓ186は石匙の粗製品と考えられる。全て縦長剥片を素材としている。

箆状石器(第42～44図Ｓ189～Ｓ215)

主に両面調整で頭部の狭いもの(Ｓ189～199) 、棒状のもの(Ｓ200～204)、楕円形に近い形のもの(Ｓ205～215)に分けられる。それぞれ主剥離面を大きく残すものと、そうでないものがある。頭部の狭い